

# 『十二使徒たちの選任』

'20/09/27

聖書箇所: マルコの福音書 3 章 13-19 節 (新約 p.69)

皆さんは、これまでに、何か大きなプロジェクトを任された…というようなご経験をお持ちでしょうか？⇒例えば、経営の傾いた会社を再建するとか、荒廃した学校を建て直す…といったようなことです。もし、そのような経験が無かったとしても…、もし万が一、皆さんに、そのような大きく…、また、困難なプロジェクトが任されたとしたら、果たして、皆さんは、それをどのように達成していけるのでしょうか？あるいはまた、そういった時に、どのような人物を、自分のスタッフとして選ばれるのでしょうか？

今日、私たちが学ぼうとしているみことばは、イエス様が、この地上での働きを全うするため…、そしてまた、イエス様がこの地上での働きを終えて、天に昇っていかれた後、残された弟子たちが、イエス様から託された救いのメッセージを正しく語っていくことができるようにするため、多くの弟子たちの中から、イエス様が 12 人の者たちを特別な働きのために選ばれた…という記事が載っている部分であります。

## 命題: イエス様が 12 人の使徒たちを選ばれるにあたって、なされたこととは？

今日、私たちが学んでいく聖書のみことばは、マルコ 3:13-19 になります。そこから、イエス様が、あの 12 人の弟子たちを選ばれるにあたって、具体的に、どういったことをなされたのか？ということを見ていきます。そうすることによって、願わくは、私たちも、イエス様と同じように、正しい優先順位をもって…、そして、神様から託された、イエス様の弟子を作っていくという任務を全うしていけることを願います。今日のみことばである、マルコ 3:13-19 には、このように記されてあります。

- 13 さて、イエスは山に登り、ご自身のお望みになる者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとに来了。
- 14 そこでイエスは十二弟子を任命された。それは、彼らを身近に置き、また彼らを遣わして福音を宣べさせ、
- 15 悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。
- 16 こうして、イエスは十二弟子を任命された。そして、シモンにはペテロという名をつけ、
- 17 ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、このふたりにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。
- 18 次に、アンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党员シモン、
- 19 イスカリオテ・ユダ。このユダが、イエスを裏切ったのである。

## I・祈りをもって、父なる神のみこころに従おうとされた！(ルカ 6:12-13)

ここ 13 節で、イエス様が山へ登られたとありますけれども、実は、その平行記事である、ルカ 6 章を見てもみると、この時、イエス様は十二弟子たちを選ばれるにあたって、『祈るために…』、わざわざ、山へと登られた、ということが記されてあります。そのことから分かるのは、**イエス様というお方は、常に、“祈り”をもって、父なる神のみこころに従おうとされた…**ということ、まずは、ご一緒に確認していきたいと思えます。今日のみことばの平行記事である、ルカ 6:12-13 には、こう記されてあります。

- 12 このころ、イエスは“祈るために”山に行き、“神に祈りながら”夜を明かされた。
- 13 夜明けになって、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をつけられた。

### ●みことばが教えてくれている「祈り」とは？

このみことばだけではありません。イエス様は、要所要所で、何度も、お祈りということをされています。

そこで、今一度、考えておきたいことは、「お祈り」とは一体、何であるか？という、ごく基本的なことであり、ます。私たちクリスチャンにとって、「祈り」とは、一体、何なのでしょう？確かに、イエス様は、私たちの救い主であられますが…、それと同時に、イエス様は三位一体なる、真唯一の神でもあられました。…なのに、どうして、イエス様は、祈る必要があったのでしょうか？

まず、「祈り」という言葉を、一般的な国語辞典で調べてみると、こんな風に説明されておりました、「神仏に請い願うこと。…」というような説明がされておりました。つまり、クリスチャンでない一般の方々の感覚で言いますと、「祈りとは、私たち人間が、神様に対して、何かを要求するような行為である…」と言い得るのではないのでしょうか。しかし、それに対して、聖書のみことばが教えてくれているところの祈りは、少しと言うか…、かなり違ってきます。

そこで、どうぞ、あのイエス様が祈りについて教えてくださっている、マタイ 6:5 以降をご覧くださいませでしょうか？ここは、所謂、「主の祈り」と呼ばれているみことばで…、イエス様が、祈る時には、こう祈りなさいと教えてくださった…、言わば、「祈りの見本」であります。ここでは、このように教えられています。マタイ 6:5-13、『5 また、祈るときには、偽善者たちのようであってははいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。6 あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。7 また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。8 だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたが願うする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。9 だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。10 御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。11 私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。12 私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人々を赦しました。13 私たちを試みに会わせしないで、悪からお救いください。』[国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。]』

⇒このみことばは、かなり前に、皆さんと学んだことがあります。ここで、イエス様は、私たち信仰者の祈りに、父なる神様が報いてくださる、ということをお教えてくれています。しかも、それだけではありません…。実は、天の神様は、私たちが願いをするよりも前に、もう既に、私たちに必要なものを御存じであられる！と言うのです。だって、真の神様は、全知全能なわけでしょ？…だから、ここでイエス様が教えてくださった模範的な祈りとは、私たちが、自分の願いを申し上げること以上に…、“私たちの父”が神様のみこころを求め…、私たちの思いや行動を、その神様のみこころに“沿わせていく”、ということなのです。そうですよね？

つまり、聖書のみことばが教えてくれているところの祈りとは、私たち人間の側から、神様に対して、何かを願うだけのものではなく…、実は、私たちの方が、神様のみこころを求め、そのみこころに耳を傾けるためのものなのです。…でもね、じゃあ、皆さんは、実際に、祈りを捧げていて、神様の御声を聞いたことがありますか？⇒多分、私を含め、どなたも、神様の御声を直接聞いた方はおられないと思います。…と言いますのは、その昔、天の神様がアブラハムやモーセに語ってくださったのとは違って、今の時代は、そういったような御声ではなく、聖書のみことばを通して、私たちに語りかけてくださっているからです…。つまり、私たちクリスチャンにとって、祈りとは、ただ単に、一方通行の自己満足的な語りかけや訴えのようなものではなく…、神様とのコミュニケーションでもあるわけなのです。

### ●どうして、イエス様は熱心に 祈られた ののでしょうか？

そういったことが分かってきますと…、イエス様が、事あるごとに、父なる神様に対して、祈られた理由も、

ある程度、分かってかかってきます。イエス様は、祈りを通して、父なる神様とのコミュニケーションと言うか…、父なる神との“交わり”を持っていらっしゃるのです。

イエス様が、何よりも、父なる神様のみこころを求め…、それを優先しておられた、ということをお教えるみことばがあります。それが、ヨハネ 5:19-20 です。『19 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何事も行うことができません。父がなさることは何でも、子も同様にを行うのです。20 それは、父が子をお愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。また、これよりもさらに大きなわざを子に示されます。それは、あなたがたが驚き怪しむためです。』⇒ここでイエス様が教えてくださっているように、イエス様は、自分勝手に…、自分の好きなことをしておられたのでは、決してなく…、イエス様は、常に、父なる神様のみこころを求め…、父なる神のみこころでないことは、何一つ、行なわれなかったのです。

今、皆さんは、マタイ 6 章をお開けになってくださっていると思いますが、ここをご覧くださいますと分かる通り、この当時、多くのパリサイ人たちは、一見、神様に対して祈っているようで…、神様の方を向いているようで…、その実、周りの人たちの目(周りの者たちからの評価)を一番に意識して、祈りを捧げておりました。だから、彼らは、大勢、人が集まっている会堂や、わざわざ、通りの四つ角で祈ることが好きだったのです。そうすることによって、自分が、さも、人から信仰深いと思われるからです…。

しかし、それに対して、イエス様は、祈る時には、『自分の奥まった部屋に入りなさい。…戸をしめて、…祈りなさい。』(マタイ 6:6)と教えられました。それは、祈りというものが、本来は、人に見せるためのものではなくて…、神様との1対1でなされるものであるからです。だから、ルカ 6 章のみことばが教えてくださるように、イエス様は祈るために、わざわざ、山へと登られたのです。

皆さんは、いかがでしょうか？ 皆さんは、果たして…、神様との交わりと言うか、コミュニケーションを持っておられるでしょうか？ 食事の前や寝る前に祈れば、それで良いというわけではありません。もちろん、神様に、自分の願いを、ただ申し上げるというのではありません。神様のみこころに“耳を傾け”…、神様のみこころを“知ろうとするような”機会を持ってくださっているのでしょうか？

現在、神様は、この聖書のみことばを通して、私たちに語ってくださっています。…とすれば、私たちは、祈りを捧げると同時に、みことばを読んで、神様のみこころというものに耳を傾けているはずですが…でないと、私たちの祈りは、聖書の教えるものとは違うものとなってしまえばかりか…、神を知らない異邦人と同じような、一方通行の祈りと同じようなものになってしまうのです。ひょっとしたら、一部のクリスチャンたちが、あまり祈りに関心を持たない…というのは、そういったところに原因があるのかも知れません。

ルカ 6 章に書かれてあるように、イエス様が祈るために、わざわざ山に行かれた…ということ、その直後に、イエス様が十二弟子たちを任命されたことは、全く関係の無い話ではありません。これら2つのことは繋がっているのです。つまり、イエス様は、十二弟子たちを選任する“ために”…、父なる神様のみこころを求めて…、そのために、山に登って、祈る必要があったのです。

救い主であられたイエス様には、ほんの少しも罪がありませんでした。しかし、そんなイエス様であっても、父なる神様との交わりを求めて…、また、みこころを求めて…、何度も何度も祈られました。…だったら、私たちは、そのイエス様以上に、神様のみこころを求めて、祈りつつ…、みことばを学んでいかなければいけないのではないのでしょうか？

## Ⅱ・選んだ者たちに、使徒としての働きを託された！(13-19 節)

次に、イエス様がなさったことは、その選んだ者たちに、(十二)弟子としての“働き”を託された！ということです。イエス様は、選んだ者たちのことを、決して放って置きぼりにはなさいません。当然のことながら…、イエス様は、ちゃんとした、最善の御計画の内に、すべてのことをなして下さっているのです。

### ●「使徒」という呼び名が意味するもの

今読んだみことばをご覧くださいますと、この時、イエス様が十二弟子たちを任命されたことが記されています。ルカ伝には、「使徒」という言葉も使われています。…しかし実は、この当時、イエス様のことを師と仰ぎ、イエス様に付き従っている弟子たちは、他にも大勢おりました。その中で、イエス様は、あの12人たちだけを選ばれて…、そうして、『使徒』たちとされたのです。実は、この、『使徒』(ἀπόστολος)という言葉ですが、これは、もともとは、「権威ある者から、特別な使命のために選ばれたような使者、派遣された人物、(全権)大使…」を意味するような言葉でした。つまり、彼らは、イエス様のために、特別な使命を与えられたのです。

これ以降、イエス様は、この十二弟子たちに、様々なことを教えられ…、他の弟子たち以上に、特別な訓練をもって、導いていかれます。この十二弟子たちを選ばれた理由について、このみことばは、こう教えてくれています、『14 …それは、彼らを身近に置き、また彼らを遣わして福音を宣べさせ、15 悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。』⇒つまり、イエス様は、その12人を選んで…、その者たちを身近に置かれて…、今後、自分がいなくなった後、しっかりと福音宣教ができるよう、必要な訓練をされていったわけなのです。

### ●十二使徒たちの面々

さて、今日のみことばの後半に、その12人たちの名前が載っています。どうぞ、16節以降をご覧ください。『16 こうして、イエスは十二弟子を任命された。そして、シモンにはペテロという名をつけ、17 ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、このふたりにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。18 次に、アンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党员シモン、19 イスカリオテ・ユダ。このユダが、イエスを裏切ったのである。』

つい最近、私たちが学んだみことばにもありましたように…、イエス様の弟子たちは、決して、思慮深いとか…、恐らくは、そう利口な方でもありませんでした。だから、安息日に、麦の穂を摘んで食べたことで、パリサイ人たちから非難されてしまったのです。しかし、イエス様は、敢えて、そういった12人を選ばれたのです！イエス様は、十二弟子たちを選ぶにあたって、世間一般的に見て、優秀な人材を選ぼうとはなさいませんでした…。あるいはまた、民主主義的な選挙や…、あるいは、裕福な者や権力者などを選んで…、その後の働きを有利に進めようとはなさいませんでした。

まず、十二弟子の中でリーダー的な存在であった、シモン・ペテロと4番目に名前が挙がっているアンデレとは兄弟で…、かつて、魚を捕る漁師でありました。また、2番目と3番目に名前が挙がっている、『ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ』もまた、漁師でありました。このことは、使徒4章に書かれてあることですが…、イエス様が復活 & 昇天された後、あのイエス様のことを十字架へと追いやった、その当時の宗教家たち、また、指導者たちが、イエス様の弟子であったペテロとヨハネを尋問したのですが…、そのペテロたちが、実に、大胆な弁明と言うか証しをします。あまりの、彼らの大胆さと雄弁さゆえに、その様子を見た者たちが驚いた、ということが、みことばに記されています。

それだけではありません。18節で名前が挙がっている、『マタイ』は、かつて、取税人であり…、言わば、ローマの手先であり、イスラエルの裏切り者でありました。また、その12人の中には、『熱心党员シモン』であったと、わざわざ書かれてありますけれども、実は、この『熱心党员』とは、現代に置き換えて、簡単に言い換えますと、「右翼」のような存在であると言い得ると思います。…と言うのは、彼らは、自分たちの国が政治的に独立することを強く望んで、そのためなら、暴力を振うこともいとわなかったからです。彼ら熱心党员は、ローマに税金を納めることは、神を冒瀆することにも繋がりがかねない！と主張したのです。



ところが、マタイは、かつて、その税金を徴収する立場であったわけで、本当なら、熱心党員のシモンとは相容れるはずがありませんでした…。でも、そんな者たちが、イエス様によって、十二弟子として選ばれたのです…。

イエス様は、数多く、イエス様について、従ってきていた弟子たちの中から…、父なる神様のみこころに沿った者たちを選ばれました。…というのも、神のこころを宣べ伝えるという宣教の働きは、私たち人間の知恵や力によってなされるものではなく…、私たちを選び…、私たちを用いてくださる“神様の御働き”であるからです。そうですよね？だから、あのパウロなどは、こんな証しをしてくれています。1 コリント 2:1-5、『1 さて兄弟たち。私があなたがたのところへ行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。2 なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。3 あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。4 そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、御霊と御力の現れでした。5 それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。』

⇒このように、神が選ばれ、神が用いてくださるのは、その人が知恵ある人物だからではありません。高い学歴を持っているからでもありません。ただ、真の神様を信じ…、その神様に頼り…、神様だけに仕えようとする者を、神は用いてくださるのです！この時、イエス様は、数多くいた弟子たちの中で、特に、そういったような人物たちを選ばれた…と考えられます。

### Ⅲ・愛をもって、十二使徒たちを導かれた！（17節、19節）

そして、最後、私たちは、あのイエス様が、溢れんばかりの“愛”をもって、その十二弟子たちのことを導いてくださった！ということを確認していきたいと思えます。愛に富んでおられるのは、私たちの父なる神様だけではありません。当然、その父なる神様と本質を同じくされる、イエス様もまた、神の愛（アガペーの愛）に満ち溢れたお方であったのです。

#### ●どうして、イエス様は、イスカリオテ・ユダを選ばれたのでしょうか？

今日のようなみことばで、よく質問をされますのは…、じゃあ、イエス様は、一体どうして、『イスカリオテ・ユダ』を選ばれたのでしょうか？イエス様は、彼が、後で、自分を裏切るであろうことを予見できなかったのですか？ということ。そういったことについて、皆さんは、どのように考えておられるでしょう？

初めに結論から申しますと、『イスカリオテ・ユダ』が裏切ることを、当然、イエス様はご存じでありました。だから、イエス様は、この時、ルカ6章が教えるように、『神に祈りながら夜を明かされた…』（ルカ6:12）のではないのでしょうか？確かに、皆さんもご存じのように、イエス様は、よく祈りを捧げておられました。しかし、今日のみことばのように、祈りのために、夜を明かされた、と言うのは、ほとんどありませんでした。少なくとも、みことばが、はっきりと、そういったことを教えてくれているのは、イエス様が十字架にかかれる前夜、ゲツセマネの園で祈られた時くらいではないか？と思われま。…つまり、それほど、珍しいことだったので、イエス様が夜通し祈られるということは…。

ちょっと、皆さん。どうぞ、ルカ 22:39-44 をご覧ください。『39 それからイエスは出て、いつものようにオリブ山に行かれ、弟子たちも従った。40 いつもの場所に着いたとき、イエスは彼らに、「誘惑に陥らないように祈っていなさい」と言われた。41 そしてご自分も、弟子たちから石を投げて届くほどの所に離れて、ひざまずいて、こう祈られた。42 「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころとおりにしてください。」43 すると、御使いが天からイエスに現れて、イエスをカブじた。44 イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に

落ちた。』⇒このみことばをご覧くださいますと…、まずは、ついさっき学んだ、「祈りの原則」というべきものを見ることが出来ます。…と言いますのも、ここでイエス様は、ご自分の願い（＝出来ますならば、この杯を取りのけてください）を申し上げていますけれども…、でも、どうぞ、『みこころならば』という言葉を使って、「いえ、父なる神様のみこころこそが最優先です！」、「どうぞ、わたしの願いではなく！あなたのみこころの通りになさってください！」という風に祈っておられますでしょ？…それと、このみことばには、『いつものように…』とか、『いつもの場所に…』とあることから、イエス様たちが、この時だけではなくて…、頻りに、ゲツセマネに連れて、よく祈っておられたことが分かります。

#### ●このことを通して、イエス様が示してくださったこととは？⇒神の愛！

皆さんは、ご存じでしょうか？実は、詩篇 41:9 に、このような預言がなされてあります。『私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。』って…。実は、このみことばは、イエス様自身が引用された<sup>1</sup>ように、イエス様と、それを裏切ったイスカリオテのことを預言しています。そのことが、ヨハネ 13章に書かれてあります。

ヨハネ 13:21-27、『21 イエスは、これらのことを話されたとき、霊の激動を感じ、あかしして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ります。」22 弟子たちは、だれのことを言われたのか、わからずに当惑して、互いに顔を見合わせていた。23 弟子のひとり、イエスが愛しておられた者が、イエスの右側で席に着いていた。24 そこで、シモン・ペテロが彼に合図をして言った。「だれのことを言っておられるのか、知らせなさい。」25 その弟子は、イエスの右側で席に着いたまま、イエスに言った。「主よ。それはだれですか。」26 イエスは答えられた。「それはわたしがパン切れを浸して与える者です。」それからイエスは、パン切れを浸し、取って、イスカリオテ・シモンの子ユダにお与えになった。27 彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼に入った。そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」』

⇒旧約聖書に、イスカリオテの裏切りが預言されていた…ということは、実は、このことも含めて、すべてが神の御計画であったということです。一部の人たちは、イエス様の十字架には、彼の裏切りが必要であった…と言いますが、私はそうは思いません。イエス様は、イスカリオテの裏切りがあらうとならうと…、十字架にかかることがおできになったからです。

でも、私は、こう考えます。イエス様は、イスカリオテに対して、彼の裏切りや策略をすべて知った上で、彼にも愛と憐れみを示し続けられました。実は、それこそが、父なる神様のみこころであったのではないのでしょうか？…と言うのは、先程見た詩篇 41 篇の預言ですが…、そこには、親しい友に裏切られる救い主の姿が預言されてあります。例えば、イエス様は、最後の晩餐の時、彼に、パン切れをお与えにされました。実は、こういった行為は、この当時、主人が客に示す“おもてなし”の行為でありました。しかも、恐らく、イエス様は、そのことを、1番初めに、イスカリオテに対してなされたのです。

それだけではなく！イエス様は、その最後の晩餐の時、裏切りがあることを話されましたが、弟子たちの中で、誰が裏切るのか？ということに関しては、イスカリオテが去った後も、何もおっしゃいませんでした。だから、彼が出て行った時、弟子たちのある者は、「イスカリオテが何か買物を頼まれたのか？」と思った者も居たわけ。す。

イエス様の愛や憐れみ…、また、忍耐といったものは、最後、ゲツセマネの園でも表わされています。イスカリオテが、イエス様を裏切るためにやってきた時、イエス様は、『友よ…』（マタイ 26:50）とおっしゃられました。そのように、イエス様は、最後の最後まで、彼に対して、愛と憐れみを示されて…、彼が悔い改めるように導いてくださったのです！…そんなイエス様であったから、今日のみことばが教えてくれているよう

<sup>1</sup> ヨハネ 13:18 を参照のこと。

に、かつては、『ポアネルゲ、すなわち、雷の子…』と呼ばれるほど、感情的で、怒りやすかったはずのヨハネが、その晩年には大きく変えられて…、「神の愛」を訴え…、「神の愛」を代表するような使徒へと変えられたのです。いえ！ヨハネだけではありません！他の弟子たちだって、皆、イエス様の愛によって…、その訓練によって、変えられていったのです！…しかし、イスカリオテのことで残念だったことは、彼だけは、最後の最後まで、とうとう悔い改めることなく、最期には自殺してしまったことです。

イエス様は、十二弟子たちを選任するにあたって…、夜を徹して、祈り続けてくださいました。恐らく、そこには、今お話したような葛藤があったから…、かも知れません。イエス様こそは、十二弟子たちだけでなく…、ここにおられる皆さんのことをも選んでくださり…、この世から召し出してくださいました。それこそが、「教会＝エクレシア」(ἐκκλησία<sup>2</sup>)という言葉の由来(≒召し出された者たち)です！

だって、ヨハネ 15:16 で、イエス様は、『あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。』ということを教えてくださいませんか？

イエス様を選び…、イエス様が任命をされたのは、何も、十二弟子だけではありません。ここにおられる皆さんのことをも、神はみこころの内に選び…、神のために用いようとしてくださっているのです！神は、皆さんのことをも選び放しにしません！神は、必ず、皆さんのことを助け…、皆さんに必要な励ましや導きをも与えてくださいます。そうして、神様は、今も、皆さんに対して、溢れんばかりの愛を示し…、忍耐の限りを尽くして、私たちのことを訓練してくださっているのです！

#### <励ましの言葉>

どうぞ、今さっき、読んだみことばの、そのすぐ後をご覧ください。そこで、イエス様はこうおっしゃいました。ヨハネ 15:17、『あなたがたが互いに愛し合うこと、これが、わたしのあなたがたに与える戒めです。』とあるように…、神様によって選ばれた私や皆さんがすべきことは…、イエス様が示してくださった愛を、今度、私たちが家族や教会のメンバー…、それに近所の方々に示していくことです！「こんな人は愛せない…」ではなく、「愛そう！」としていくかどうかです。…なぜなら、イエス様は、自分のことを裏切り続けた者を、最後まで、愛し続けられたからです。

マタイ 5 章で、イエス様が、『44 …自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。… 46 自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。… 48 だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。』(マタイ 5:44-48 の抜粋)と教えてください…、自らのいのちをも犠牲にして、私たちのために救いの道を備えてくださいました。そのことを実践してくださったイエス様に倣って…、どうか、私たちも、ますます、多くの方々に、みことばを伝え…、神の愛(アガペーの愛)を実践していくことができますように、お祈りしたいと思いません。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。

<sup>2</sup> 原語では、「ἐκ」(~から)と「ἐκκαλῶ」(呼び出す)の合成語で、「この世から選ばれ、召し出された者」という意